

【音楽科】

音楽的な見方・考え方を働かせ、「協働」を通して 表現や感じ方を広げ、深める生徒の育成

～深まりを実感することに焦点をあてて～

鳥井 雄介

要約

本校音楽科では、昨年から、「音楽的な見方・考え方を働かせ、『協働』を通して表現や感じ方を広げ、深める生徒の育成」と主題を設定し、研究に取り組んでいる。『協働』を通して、他者の考えを理解し、自分の表現や感じ方を広げることができた。一方で、その広がりや音を音で実感することや、他者のどのような考えをもとに再構築したのかという具体が曖昧になり、表現や感じ方の深まりを実感することに課題が見られた。今回の研究は、深まりの実感に焦点をあてて取り組んでいくこととする。

1 主題の設定の理由

1. 1 これまでの研究の成果と課題から

昨年の研究では、生徒が表現や感じ方を広げるために、歌唱・器楽や鑑賞において、導入で感性を働かせて楽曲を感じ取り、よさをまとめる際に、要素とその働きの視点を根拠として音楽的な見方・考え方を働かせられるようにした。また、生徒の意見交流では、立場の違う相手との交流を意図的に設定することで、自分の主張だけでなく、相手の考えを理解し、新たな考えに気付けるようにした。

このような実践を踏まえ、昨年度における研究の成果と課題を次のようにまとめた。

成果

・「協働」を通して、仲間の考えを理解して比較しながら、表現を工夫したり、楽曲の特徴を感じ取ったりして、考えを広げることができるようになった。

一方で、目指す姿と照らし合わせた時に次のような課題が見られた。

課題

・他者の考えを理解して考えが広がったものの、再構築する際に、表現や感じ方の深まりを実感することができていない。

研究1年次に実践した「アルベルト・ヒナステラのピアノソナタ」の鑑賞の実践において、交流から音楽の感じ方が広がる姿がみられた。しかし、感じ方の深まりという点においては、次のような生徒の姿がみられた。

【交流を通して自分にはない感じ方に気付いた見方・考え方の広がり】

- ・となり合う音の重なりが多い
- ・細かい音が多く、伸ばす音が少ない

この生徒は、広がった感じ方から魅力をまとめる紹介文に「細かい音が多く、伸ばす音が少ない」というポイントを取り入れたいと考え、次のように紹介文にまとめた。

【交流をもとに書いた紹介文】

この曲の魅力で、一番印象に残ったことは、リズム感がいいということです。音を左手と右手で交互に弾くことでひとつのまとまりのあるリズムができています。そうすることでリズムが分かりやすくなって印象に残りやすくなっていました。また、音の変化が多いということから、さまざまな感情を読み取ることができました。音の重なりが不協和音になっているので、耳に残るような印象深い作品になっていました。だから私は、音の重なりもあり、リズム感がいいということが魅力になっていることがわかりました。

このように、広がった感じ方から、まとめに取り入れたいポイントが生かされていないものとなった。これは、交流した相手の感じ方を理解していても、その部分を聞き返して実感できていないからだと考ええる。

1. 2 学習指導要領の改訂¹⁾より

平成29年に告示された中学校音楽科の改訂の基本的な考え方は次のように示されている。

- ・感性を働かせて、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりすることができるよう、内容の改善を図る。
- ・音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化についての理解を深める学習の充実を図る。

これらを行うためには、音楽科の目標にある音楽的な見方・考え方を働かせて音楽活動を進める必要がある。生徒は題材や単位時間を通して、音楽的な見方・考え方を広げ、表現の変容を生徒自身が捉えることで、感性が豊かになっていく。そして、他者と協働することで自分にはない考えに気づき、表現や感じ方を広げ、深めることで音楽活動を楽しみながら学べると考える。

また、音や音楽と自分との関わりを築けるよう、生活や社会の中の音や音楽の役割、音楽文化の理解に関わって、『学習指導要領の(3)学習内容の改善・充実の⑤歌唱教材及び器楽教材の選択の観点の改善』には、「生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化について関心や理解を深めていくことについて、更なる充実が求められる」とされたことを踏まえて、配慮事項として次の項目が新たに示されている。

- ・生活や社会において音楽が果たしている役割が感じ取れるもの

これは、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成のために必要なものであると同時に、音楽科教育を実生活とつなげていくために重要な内容であると考えられる。

昨年までの研究の成果と課題や今日的な課題から、研究主題を次のように設定した。

音楽的な見方・考え方を働かせ、「協働」を通して表現や感じ方を広げ、深める生徒の育成
～深まりを実感することに焦点をあてて～

研究1年次(研究報告2018)²⁾は広げることに焦点をおいて、研究を進めてきた。研究2年次は深めることに焦点をあてて進めていきたいと考える。交流したことをもとに、仲間の考えが必要かどうか判断し、活用して表現や感じ方の変容を感じることで深まりを実感することであると考える。例えば、交流を通して、自分と異なる考えに気付いたときに、その表現や感じ方に触れて理解するだけでなく、他者の考えも踏まえて、仲間が感じた視点を試してみる。そうすることで、自分の考えが広がり、どのような考えを取り入れたことで、感じ方の変容に気付くことができる。

2 表現や感じ方を広げ、深めることについて

2. 1 広げる姿とは

仲間と交流することで自分にはない表現や感じ方に気づき、そのよさを理解すること。例えば、鑑賞において、多様に音楽を捉えられる教材を提示し、「強弱と音色から激しく迫ってくる感じがする」という異なる感じ方の生徒同士を交流する。そうすることで、「強弱の視点の共通点とリズムと音色の視点の相違点に気付くことができる。

2. 2 深める姿とは

交流したことをもとに、仲間の表現や感じ方が必要かどうか、判断し、活用すること。例えば、表現において、仲間との交流を通して、仲間の表現を取り入れて試すことで、よりよい表現を目指すだけでなく、試した上で、自分の願いを実現するための表現に必要なかどうかを判断することも深まりだと考える

3 音楽的な見方・考え方を働かせる姿とは

感性を働かせて感じ取った音や音楽からイメージしたことや、表現を創意工夫する際の根拠を、音楽を形づくっている要素と関わらせて考えること。例えば、生徒が楽曲と出会うときに、感性を働かせながら感覚的にイメージを持つ生徒と、要素に視点において感じ取る生徒に分かれることが多い。イメージと音楽を形づくっている要素を関わらせることで、自分の感じ方に根拠が生まれ、イメージを広げるとともに、要素の働きと関連をさせながら考えたり音楽を感じ取ったりすることができる。

4 願う生徒の姿

本校音楽科が「願う生徒の姿」は次のような姿と捉えている。

音楽的な見方・考え方を働かせながら、自分と他者の考えを比較し、他者の考えを自分に取り入れるかを判断、活用する中で、表現や感じ方の変容を実感できる生徒

本校生徒は、自分なりの表現への願いや、感性を働かせて感じたことのイメージを持ったりすることができる生徒が多い。また、交流を通して他者の考えを理解して自分の考えを広げられる姿も多い。その広がった考えを理解するだけでなく、自分にとってその考えを取り入れるかを判断し、活用することで考えが深まっていくと考える。音楽に対する自分にとっての新たな価値を見出すために、自分と他者の考えを比較しながら、自分の考えを再構築することで、目指す生徒の姿に迫っていきたい。

5 全校研究で目指す生徒の姿との関連

音楽科として「願う生徒の姿」と「全校研究で目指す生徒の姿」とのつながりを以下の図1のように捉えている。

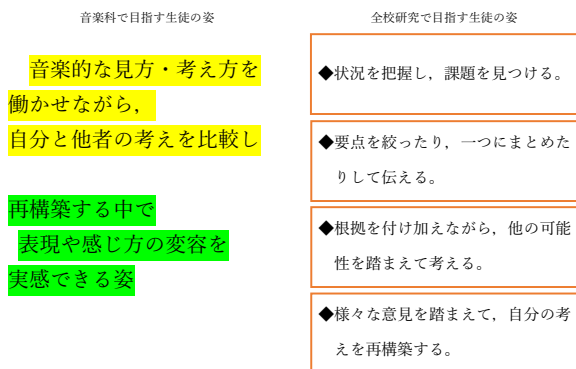


図1 願う生徒と全校研究とのつながり

音楽科では、特に「様々な意見を踏まえて、自分の考えを再構築する。」ことに重点をおいて研究を進めてきた。目指す生徒の姿にするために、「音や音楽から感じ取ったイメージの根拠は」と視点をもてるようにしてきた。

6 研究仮説

このような生徒に迫るために、次のような研究仮

説を掲げ研究に取り組むこととする。

生徒の関心が高まる教材に触れさせることで、音楽的な見方・考え方を働かせやすくなる。そこで、生徒同士の交流をすることで、多様な考えを理解したり、新しい考えが生まれたりする。その考えを活かして、思いや願いにあった表現に近づけるための工夫にしようとして試す過程の中で、他者の考えを取り入れるかどうかを判断、活用し、表現や感じ方の変容を実感することができるであろう。

Q楽しいと感じた領域は

A・歌唱31% ・創作17% ・器楽44%
・鑑賞8%

Q楽しいと感じた理由は（器楽についてのみ抜粋）

A・琴の響きがきれいで演奏していると楽しいから。
・琴でアンサンブルをした時に、音がかさなった時の音色や響きが合唱では味わえないものだったから。

このように、普段味わうことのできない教材に触れることで、音楽に対する新たな感性を育むことにつながると考える。その感性をもとに交流を含めた学習を進めていくことで、音楽的な見方・考え方が働き、新たな表現や感じ方を見出そうとする姿が生まれてくると考える。椿本恵子³⁾による教材開発「相撲甚句の文化的背景を生かした創作活動の展開」の実践には「教材の特性を学習活動の展開につなげることの大切さ」や「文化的背景を踏まえたコミュニケーションが図られる創作活動をすることで、表現の工夫の深まり、音楽表現の深まり、さらには、演奏技能の高まりに繋がる創作活動となった。また、文化的背景を踏まえた活動の場を設定することで、子どもたち自身が自然に文化的背景に気付き音楽的価値を高めることができる。」と、新たな教材から生活や社会において音楽が果たしている役割を感じ取り、音楽に対する新たな価値を見出すことに繋がられる成果からも新たな教材開発は必要であると考ええる。

また、加藤明代⁴⁾の「表現の深まりを目指して」の実践には「自分の考えが友達に伝わらないことが

多々あった。同じ曲を使っても全く違う踊りになる
 ということは、人それぞれ異なる感性があるから」
 という生徒の記述がある中でも、「相互の演技を観賞
 することが、自分自身やグループの表現の変容を振
 り返る好機になった」と示されていることから、
 深まりを実感するためには、他者との交流を通して
 広がった考えを理解するだけでなく、それを試すこ
 とで自分の表現や感じ方の変容を感じることができ
 ると考える。それをもとに自分の願いを実現するた
 めに考えを再構築していくことが必要であると考え
 次の研究内容を進めていくこととした。

7 研究内容

このような研究仮説を実証するために、次のよう
 な研究内容を考え実践することにする。

【研究内容1】

関心を高め、新たな感性を育むための工夫

【研究内容2】

表現や感じ方の広がりを試す場の設定

【研究内容3】

深まりを実感するための振り返りの在り方

【研究内容1】

関心を高め、新たな感性を育むための工夫

音楽の学習では、題材を通して何を学ぶかが重要
 になる。題材の中で、生徒が触れたことのない教材
 を選定することで、関心が高まり、その音楽に触れ
 ることで、新たな感性が育まれることにつながると
 考える。その感性をもとに、楽曲を要素を用いて聴
 くことで音楽的な見方・考え方を働かせることを促
 進することにつなげていきたいと考える。ここでは、
 先述したように、生活や社会の中の音や音楽、音楽
 文化と豊かに関わる資質・能力の育成のために、歌
 唱教材及び器楽教材の選択を考えていく。

中学校2年生の実践

指導内容 「テクスチャ、リズム、音色」

題材名 「リズムアンサンブルをつくろう」

教材 「カホンによるリズムアンサンブル」

鑑賞教材 「ライオンキングより Circle of Life」


この題材では、指導内容を「テクスチャ、リズム
 ム、音色」として、カホンを使ったリズムアンサン
 ブルを創作する。題材の始めには、カホンの発祥や

楽器の特徴について学び、教具への興味・関心を高
 めるだけでなく、世界の音楽文化への理解をするこ
 とができた。

授業を進めるにあたっては、「ライオンキングの
 オープニングシーンを考えよう」というパフォーマ
 ンス課題を設定し、グループごとにテーマを決めて
 創作を進めていくことにした。また、「ライオンキ
 ングより Circle of Life」を鑑賞する活動を通して、
 ライオンキングの世界観を理解した。そこからリズ
 ムアンサンブルだけでなく、動物の動きや動物の動
 きに合わせたパフォーマンスを考えながら、リズム
 アンサンブルを創作していくことにした。

創作活動を行う中で、リズムのみに視点を当てる
 のではなく、他の強弱や速度などの要素と関わらせ
 ることで、アンサンブルとしての表現の幅を広げら
 れるようになると考えた。「主となるリズムに対し
 て、それを支えるパートのリズムをどのように構成
 していくか」という視点を投げかけることで、既習
 事項を生かして創作活動に取り組む生徒が見られた。
 生徒からは次のような考えがみられた。

<p>「音」からのイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明るい音で(音色) ・刻んだリズム(リズム)から <p>「動物たちが歩いている感 じ」(イメージ)がする</p> <p>さらにその音が大きく(強弱) なって「雄大さや広大さ」 (イメージ)を感じた</p>	<p>「映像」からのイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの動物が歩いて いる ・助け合っている感じ ・肉食動物と草食動物が共 存している
--	---



「テーマ」を創造

【図2】映像から感じ取ったイメージ

また、カホンの奏法については、実際に楽器を触る
 中で次のような考えがみられた。

- ・音の高さや強さを変えるために、指の腹を使っ
て位置を変えて叩く。
- ・重く鈍い音を出すため手のひらを使って叩く。
- ・軽く明るい音で細かく速い音を出すために指
の関節や爪を使って叩く。
- ・「砂のような音」を出すために、爪をこするよ
うに出す。
- ・軽く明るい音をより強く出すために、関節を使
って叩く。

このように音探しの際には、様々な要素との関わり
 に気づき、考えを広げていく姿が見られた。これ
 らの音を使ってリズムを重ねていくことで、要素と

その働きや要素同士の関わりを考え、音楽的な見方・考え方を働かせることを促進できるようになったと考える。

【研究内容2】

表現や感じ方の広がりを試す場の設定

音楽表現を創意工夫したことや、鑑賞した楽曲のイメージを交流することは、自分では気付かなかつた新しい発見をすることができる。このような新しい発見をし、そのよさを理解することが、表現や感じ方を広げることにつながる。しかしながら、他者の表現や考えに触れるだけでは、比較したことを音で実感することができない。そこで、実際に交流して気付いた新たな見方や考え方を取り入れて音楽表現として試していくことが必要だと考えた。考え方を踏まえた上で音楽表現をすることで、音楽表現の変容を生徒が実感することにつながっていくと考えた。

中学校1年生の実践

指導内容 「速度、強弱」

題材名 「速度と曲想とのかかわり」

教材 「カリブ夢の旅」

この題材では、指導内容を「速度、強弱」とし、前半と後半の速度の違いから生まれる曲想を生かして、表現を工夫していくことを目標とした。ここでは、ゆったりと落ち着いた前半の部分を船出前の歌詞の意味から強弱を考えて工夫する活動を行った。特に、冒頭の女声パートが主旋律になる「めをさませ」の部分と中盤で男声が主旋律になる「ぼくはゆく」の部分に焦点をあてた。ここでは、主旋律に対する旋律はスキヤットになっているが、同じ強弱記号の指示があるため、「どのような思いから」、「どのような強さで歌うと良いか」を考えグループで表現を工夫する活動を行った。

【冒頭】

【女声パート】

- ・「めをさませ」の「p」は海に眠っている夢に向けて、小さくささやくように歌いたい。
- ・「これから夢を探しにいくぞ」という強い気持ちだけど眠っているから、小さいけどはっきりと歌って伝わるようにしたい。

【男声パート】

- ・「ルー」はゆっくりと吹くそよ風を表すように小さく歌いたい。
- ・副旋律だから主旋律より小さく歌うといいと思う。

このように、自分のパートの願いはもてるものの、他パートがどのような思いで、どのように歌っているかを意見交流で理解できても、音を根拠にして交流することができない。そこで、楽曲の中間部では、それぞれの思いを交流する中で、他パートの立場も考えながら様々なパターンの強さを試す場を設けるようにした。そうすることで次のような考えの変容が生まれた。

生徒Aと生徒Bの交流する様子

生徒A「僕はこの部分で、探しにいくぞという決心を表したいから、主旋律を力強く歌っていきたい。」

生徒B「私は、副旋律だからルーの部分はfでも少し抑え目にして船が切る風を表したい。」

～試す～

生徒A「今くらいだと、主旋律は際立つけれど、僕はルーの部分のf大きな波を表すものだと思うから主旋律と同じくらいで歌ってほしい。」

～試す～

生徒B「確かにこれくらいだと、両方が盛り上がるって、強い決意が表れる気がする。じゃあ、次は、ルーを最初より強めながら主旋律よりは弱く歌うのも試したい。」

～試す～

このように、他者の考えを理解し、何度も試しながら音で試すことで、表現の変容を実感することができた。

【研究内容3】

深まりを実感するための振り返りの在り方

一単位時間に表現や感じ方の深まりを実感するためには、どのようにして自分の考えが変わったり、新しい気づきが生まれたりしたかを理解することが重要だと考える。そのために、学習の振り返りを工夫することで、自分の考えを振り返ることができるよう次の二つを工夫した。

一つ目は授業の終末において、教師が「どのよう

な考えに気付いたか。そこで、何ができるようになったのか。そして、どのように表現や感じ方が変わったか。」を発問するようにした。このような発問を生徒に投げかけることで、生徒が自分の変容について考えることができるようになる考えた。

二つ目は、学習の振り返りにおけるワークシートの整理である。自分の思いや意図のみをまとめるのではなく、交流の中での気づきや他者の考えを踏まえてまとめられるように、新たな気づきを色分けしたり下線を引いたりするように指導した。

中学校3年生の実践

指導内容 「構成」

題材名 「構成と表現とのかかわり」

教材 「あなたへ」(歌唱)「花火」(鑑賞)

この題材では、指導内容を「構成」とし、合唱曲とpopsの構成の共通点から、Aメロ、Bメロ、サビの部分の表現を考えて構成を生かした表現を創ることを目標とした。

具体的には、Aメロ、Bメロはサビに向けて少しずつ盛り上がるだけでなく、落ち着いた雰囲気があるため「文節の頭の言葉の強さ」、「子音の発音」と「フレージング」の3つから、自分の願いを表現するために必要なポイントを選択して工夫できるようにした。下記は、交流を通して、願いを実現するために、自分が選択した視点以外も大切だと気づき、表現の深まりを実感した生徒の振り返りである。

【表現への願い】

私はAメロとBメロで旅立ちの思いを強く伝えるために、文節の頭の言葉をはっきり伝えたいと思います。その思いを伝えるためには、一言一言がブツブツ切れていたら伝えられないと思うので、フレーズ内をなめらかに歌いたい。

【交流を通して深まった考え】

今回は、旅立ちに対する様々な思いを強く伝えるために、文節の言葉をはっきり伝えることとフレーズをなめらかに歌うことを意識しました。文節の頭の言葉を意識していくうちに、交流の中で、フレーズはなめらかに歌っているので、文節の頭の言葉を強くするだけでなく、子音の発音にも気をつけるとより言葉がはっきりして思いが伝わるとアドバイスをもらって、その2つのポイントをつなぐことで、自分の願いに近づく表現に

なつたと感じました。また、フレーズをなめらかにつなぐことは、他の部分にも活かすことができたので、次回のサビの部分の表現にもつなげていきたいです。

このように、交流の中での新たな見方や考え方の気づきを再構築する際に、明確にすることで、表現の変容を生徒自身が自覚できるようになったと考える。

8 今年度の成果と課題

- 新たな教材を開発することで、主体性が生まれ、新たな感性を育むことに繋がった。
- 自分と他者との考えを比較しながら、表現を何度も試すことで、表現の広がりや音で実感できるようになった。
- 再構築の際に「なぜ」、「何が」、「どのように」、と自分の考えの変容を明確にすることで、表現や感じ方の深まりを実感できるようになった。
- ▲新たな教材でなく、教科書の教材においても、生徒が主体的に学んでいける指導の工夫が必要である。

参考文献

- 1) 2017 中学校学習指導要領解説 音楽編 6月改訂
- 2) 岐阜大学教育学部附属中学校 2018 研究報告
- 3) 大阪府守口市立藤田小学校
図形楽譜づくりにおける個の思考過程の展開と環境とのかかわり：バレエ組曲《火の鳥》より〈終曲〉を教材にした6年生の実践分析を通して
- 4) 保育養成校における表現指導の取り組み—表現の深まりを目指して—